佐竹昭広著

古語雑談

岩波新書

佐竹昭広著

古語雑談

岩波新書

350

佐竹昭広

1927年東京に生まれる
1952年京都大学文学部卒業
専攻—国文学
現在—成城大学教授
著書—「万葉集抜書」(岩波書店)
「下剋上の文学」(筑摩書房)
「民話の思想」(平凡社)

古語雑談　　岩波新書(黄版) 350

1986年 9 月 22 日　第1刷発行 ©
1986年10月30日　第3刷発行

定価 480 円

著　者　佐竹昭広

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所　㈱岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・理想社　製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　Printed in Japan

目

次

二色の虹……40
24 青　27 青・赤・白・黒　30 赤い舟
25 青と黄　28 赤と黄　31 紫
26 英訳『古事記』　29 黄塗りの舟
花ぞ昔の香ににほひける……50
32 紫のにほへる妹を　35 今は盛りににほふらむ
33 咲く花のにほふがごとく　36 橘のにほへる香かも
34 つつじ花にほへる君が
青葉若葉の日の光……58
37 光　39 川の瀬光り　40 光　儀
38 雪の光

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

慇懃に我が思ふ君は……65
41 慇懃　43 過所
42 朝参　44 戯笑の歌
はや教へなん九九の算用……73
45 二八十一　49 二九と四九
46 二九十八　50『乳母の草子』　53 算木とそろばん
47 九九　51 公家と高利貸　54 半弓と鉄砲
48 九九と二二　52 そろばん
右は弁当、左は不便……89
55 疲労　57 弁当　59 さとりのわっぱ
56 不弁と不便　58 抄物ヲ読マウゾ　60『法華経直談鈔』

貧窮殿……101
61 無力　63 貧乏神
62 乏少　64 貧窮
ずつなし者の節句ばたらき……107
65 術ない　68 方言辞典　71 惰けもの
66 ずつなし　69 ずくなし　72 不精の悪魔
67 黒豆かぞへ　70 大ズク、小ズク　73 懶惰と懈怠
雲霧といへば俳諧なり……122
74 鶯の狂言　77 漢語の俳諧性　79 畳字連歌
75 雅と俗　78 俳諧師宗祇　80 和語と漢語
76 俳言

物皆は新まるよし……135
81 展転と灼然
82 いちじるしい
83 火気
84 ほけ・ほのけ
85 可能な訓
86 占相
87 昼か夜か
88 左右
89 まで・まかぢ・まそで

大かた誤字にぞありける……149
90 誤写
91 『校本万葉集』
92 本文校訂
93 沢瀉注
94 木の暮闇

文字を余す事好む人多し……156
95 田舎宗匠
96 指を折る
97 字余り
98 一字千金
99 西行と宣長
100 宣長の法則
101 あらはに余りたり
102 と思ふ
103 夢といふものぞ

よく見れば此の格なり……170

104 母音の重出　106 石垣謙二先生
105 母音の脱落　107 『万葉集』の字余り　108 字余りの例外　109 「火気」再説

人さまざま……179

110 たまゆら　112 たまかぎる　114 滂　動
111 ゆら・ゆらく　113 玲　瓏　115 人麻呂の名歌

よき子を持ちぬれば……188

116 五右衛門忌　118 死一倍　120 別本『文正草子』
117 『本朝二十不孝』　119 『文正草子』　121 孝　子

祈らずとても神やまもらん……202

122 北野の秘歌　123 『天神大事』　124 まことの道

あとがき……207

はなしは庚申の晩

1　はなし

古語（ここ）についての雑談（ざつだん）をするということは、古語について「はなし」をするということである。少なくとも「はなし」という語のもとの意味に即していえば、そういうことになる。

咄（ハナス）雑談

「はなし」ということばが文献の上に現われはじめる時代は意外に新しく、室町時代の末頃からであるが、『天正十七年本節用集』

に、「咄雑談」という説明がついている通り、用法はかなり後までこの意味を失わない。

春のものとて遊ぶ人々
起きもせず寝もせで夜半にするはなし

江戸時代初期の俳諧撰集『鷹筑波』に見いだされる句である。「はなし」のもつ遊びの性格は、右の句を通しても十分うかがえるだろう。「武辺ばなし」「手柄ばなし」「化物ばなし」「諸国ばなし」「お伽ばなし」等々、いずれも肩のこらない雑談であった。

「はなしは庚申の晩」ということわざがある。庚申待の夜を一同眠らずに過ごすためには、くつろいだ雑談が何よりの目ざましぐさだったのである。

2　噺と話

「はなし」の原義が、肩のこらない雑談、くつろいだおしゃべりであった以上、今日い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

うような意味での「大事なはなし」などというものは本来ありえなかった。「はなし」は大事にあずからない。その代わり、おもしろく、珍しくなければならなかった。

「さて何も珍しいはなしはなかつたか」

「さればその事でござる。私の居たあたりで色々の雑談を申してござるが、中にも物の成り上ると申すはなしを致いてござるが、聞かせられてござるか」

「いやいや、身どもは聞かぬが、それは何といふはなしぢや。云て聞かせい」

（狂言「成り上り」）

戦国の武将は、軍陣の夜や城中のつれづれを慰めるために、「はなし」の専門的提供者を召し抱えていた。「はなしの衆」「御はなしの衆」などと呼ばれた人びとである。その代表的人物の一人が、秀吉の寵臣曾呂利（そろり）新左衛門であった。

「はなしの衆」ならずとも、「はなし」は耳あたらしく新鮮であることをもって生命とした。江戸時代の前期、すでに「はなし」に対して、「噺」という日本製の漢字が発明さ

れていた事実こそ、新鮮であることを「はなし」の必要条件と認めていた時代の意識を物語るものであろう。その頃、まだ漢字「話」は、もっぱらカタルとのみ読まれていて、ハナスとは読まれていない。

3 雑談

現代では「雑談」の二字を何のためらいもなく、ザッダンと読む。古くはこれをザウタンと読んだ。十七世紀初頭、キリシタンの宣教師たちも「雑談」の語をローマ字ではっきり Zōtan と記録している。ザウタンがいつごろザッダンに変わるのか、『節用集』の類を手がかりに、大まかに時代を下ってみる。

徳川九代将軍家重の時代、寛延三(一七五〇)年の『懐宝節用集綱目大全』では、昔のままザウタン、ただし、ザウの部分はつとに開合の別をうしない、ゾウと発音されていたはずだ。文政元(一八一八)年『倭節用悉皆袋増字』に「雑談 トリマゼタセケンバナシ」、「談」が濁音ダンに変わっている。一八六七年、ヘボン編『和英語林集成』も Zōdan である。

そうして、明治二十三年刊『増補東京節用集』、明治二十六年刊『新撰日本節用』に及んでようやくザッダンという読みが見つかった。

この語形が明治二十三年以前のどの辺までさかのぼれるか、さらに深い調査を必要とすることは勿論であるが、とにかくザッダンという語形の成立が歴史的に相当新しいものだということは言えそうである。

4　話と放し

「冗談」という語は「雑談」から発生したという説を出したのは柳田国男であった（『不幸なる芸術』）。発音も意味もよく似ているところが魅力的であるが、両者の関係を立証することは容易ではない。同様の困難は「話」の語源についてもある。「放し」に結びつける説がそれである。

古書には、「話」「話す」などに対して「放」という字をあてた例もたしかにあるし、口から出まかせの「咄」は、意味的にも「放し」と関連がありそうだという印象は捨てがた

い。しかし、同音異義語を、もと同一語と認定するには、異義派生の現場を抑えなくてはならない。「放し」「放す」の用法と意味の変遷を歴史的に検討し、これがどのような経路を通って「話」「話す」の意を担うようになってゆくか、意味変化の分岐点が確実に突き止められてはじめて、「話」と「放し」はもと同一語だったと認められることになる。

5　もたれる

意味変化の分岐点を押さえることによって、同音異義の別語がもと一語だったと判明する適例として、物に寄りかかる意の「凭(もた)れる」と「持たれる」との関係を挙げることができる。

「凭れる」は、文語では下二段「凭る」、室町末、十六世紀には使用されていた。お伽草子『福富(ふくとみ)長者物語』に「〔爺ハ〕砧(きぬた)の盤にもたれて云々」という用例もある。少しさかのぼって十五世紀、本願寺の蓮如(れんにょ)上人（一四一五―一四九九）が、「おれは門徒にもたれたり。ひとへに門徒に養はるるなり」と語っている（『空善記』）。この「もたれ」は、依存して寄

りかかっている意にも取れるが、同時にまた、持ち支えられている意にも取れる。後者ならば、「持ちつ持たれつ」の「持たれ」と同じく、「持つ」の受身形である。このように両様の解釈が成り立つということは、ここに意味変化の分岐点が見いだされるということである。

「凭(もた)る」は間違いなく「持たる」から派生独立した語であった。蓮如上人の生きていた十五世紀頃が、「凭る」の成立期だったのであろう。

6　やすい

中学時代「こんなやすい問題も解けないのか」と叱られながら、「やすい問題」という先生のことばに興味をおぼえた記憶がある。東京では普通「やさしい問題」と言って、「やすい問題」とは言わないからだ。

平易であることを「やすい」という用法は、方言では少しも珍しくないのみならず、古語の用法においても、この方が古くかつ正統的である。「おやすい御用」「飲みやすい薬」

「行きやすい所」というふうに、古来の用法は今の東京にも残っている。

反対に、平易であることをいう「やさしい」の用法は如何。幸い、ヘボンの『和英語林集成』(一八六七年刊)には、ヤサシイの項にeasy, not difficultという訳が見える。問題はこの意味をどこまでさかのぼりうるかということである。

『万葉集』からはじまる「やさし」の語史は、江戸時代に入ってもなかなか平易の意を確かめることができない。

7　やさしい

式亭三馬(しきていさんば)の滑稽本『浮世床(うきよどこ)』初編、客の聖吉がけん蔵に言う。

「学問をしてほんとうの身持ちな人は少い」

けん蔵の答え。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com